

問ていはく、その他力の様いかむ、たゞひとすぢに我身の善惡をかへり見ず、決定往生せんともひて申を、他力の念佛といふ、たとへば、駢驎の尾につきたる蠅の、ひとはねに千里を翫カケリ○下

〔漢語大和故事〕「愚人夏ノ蟲飛デ火ニ入。事文類聚續集曰、愚人貪財、如蛾赴火、コノ語ニ本ケリ」

〔平家物語〕「でんかののりあひ」

小松殿重盛○平 此よしを聞給ひて、中 およそはすけもりらきくわい也、せんだんは二葉よりかう

ばしとこそ見えたれ、

〔甲陽軍鑑品第十三〕「信玄公を始奉り家老衆大身小身善惡の儀分別之事、附物の事宜作法手本」

に成事

一或夜信玄公宣は、澀柿をきりて木練をつぐは、小身なる者のことわざなり、中身よりうへの侍殊に國もつ人は、猶以澀柿にて其用所達すること多し、但徳おほしと申て、つぎである木練をきるにはあらず、一切の仕置かくの分なるべきかとのたまふなり、

〔清水物語下〕「人にはこのよのすぎはひをいらぬものといひなして、捨てば我拾はんと、の心持に候なり、上人こそみ、はあかぬ人とおぼえて候へ、かやうに申しても、げにもと思ひたまはぬは、忍のみはならばなれ、木はむくの木といひたるにおなじ、それは情のこはきといふ物也、」

〔萬葉集十七〕「答大伴家持歌」

大伴池主

忽辱芳音、翰苑凌雲、兼垂倭詩、詞林舒錦、以吟以詠、能蠲意緒、春可樂、暮春風景最可、略 不能默止

俗語云、以藤續錦、聊擬談笑耳、

〔鴉鷺合戰物語四〕にはとりろうこくはかせ禪法、九月廿六日合戰あるう發心事、

先度の合戰、あまりに敵おたやすくおもひて、あなづるか。つらにたをされつ。略 下

〔伊達日記上〕「其上大内長門ト申者備前好身候、節々米澤へ使ニ參御父子共ニ御存知之者ニ候、後」